

現するような下句をもってきたユーモアのセンス。下句、音楽的にも、楽しい。

スコールが通り過ぎたる夕空に雫のように宵の明星

宮地竹史

洗われたような夕空の宵の明星。「雫のように」がメルヘン風でうれしい。天文台におられる作者。「夕空に宵の明星輝けば寄り添うように木星もあり」という作もある。もつと星の歌、天体の歌を発表して欲しい。

わがまへをみやまやなぎの絮毛ゆき白蝶のゆき白き

雲ゆく

経塚朋子

三つの白いものが「わがまへ」をゆく、それだけの歌だが、だんだん大きくなって行く三つ、育つてゆくような感じがたのしい。

褐色の大きく振れる尾の記憶 野鳥凶鑑に会えたビ

ンズイ

鈴木陽美

現在と過去、二つの時間の対比のしかたが独特。ふつうは遡ってゆく記憶だが、ここでは記憶が先にあって、記憶がもとになって現在を確認しているかたち。記憶の中核が尾の動きだという点に説得力がある。

円陣のゴリラの家族だまし絵の密林の壁に向かい

祈る

石田郁男

動物園である。家族まるごと飼われているゴリラ一家の、なんとなく哀しい感じをうまく表現している。表現的には「祈る」という擬人化した表現がポイント。ここで読者は「おやっ！」と立ち止まり、作者の世界に引き

込まれる。

湖青し通りすがりに聞こえる篠笛はもう夕闇の音

楊井裕美

下句の働きで、湖の青色が少しずつ変化しつつあるのが読める。「通りすがりに」が一首に軽さをもたらしていて、感傷性が強く出そうな題材に抑制をかけている点に注目した。

試着した喪服で映るわれの顔 こんなところに母は

居るなり

中川弘子

他界された母上への挽歌のうちの一首。信じたくない思いを、具体的な場面にスポットを当てて表現した工夫に感心した。試着時に見た鏡、という場面のえらび方が自然でいい。

真つ白な三角の帆が風を見す西を東を夏空を指し

谷ちえみ

ターンしながら海上を走るヨットを遠景でとらえて、楽しい作にしあげた。ディンギーと呼ぶキャンビンもエンジンもない小型ヨットである。ターンする帆の小刻みな動きを表現した下句、うまい。

盆踊り中止とならば傘のなき死者も夜道を戻りはじ

めん

藤島秀憲

途中で雨が降ってきて盆踊りが中止になりそうな場面。「ならば」と仮定法を採用し、「傘のなき死者も」と「も」をひびかせて、自分も傘がなくて帰ることになりそうだと、この意味を表現している。